詭^き計い は、 江 こん 戸 終始 開 な な 府 () か 以 不思議な b た 来といわ 捕 知れませんが、 物 などの 事件もあ れ た、 比ではな 捕物 つ 危険を孕むことに於 たのです の名人銭 いと言えるで 形平 次 これ 0 は 手 て う。 は、 世 柄 に 0 謂 う 冷 た う捕 ちに

親 分 **ッ** ∟

飛 込 で 来た 0 は、 ガラ ッ 八 の 八 Ŧi. 郎 で

格子を外して、 何というあ わ てようだ。犬を蹴飛ばして、ドブ板を跳ね返して、 相 変らず大変が跛足馬に乗って、 関所破りで

P

ع

()

うの

か

€ √

を眺 縁 側 平次は に め 腹 て、 朝 λ 這 煙草 0 () 陽ざしを避けて、 に 0 な 煙を輪に吹 ったまま、 () 丹精甲斐のありそうもな 冷た ておりました。 e st 板敷をなつ かしむように、 e s 植 木棚

「落着 いてちゃ *()* けねえ、 e st つもの大変とは大変が違うんだ、 ね、

親分、 聞 いてお んなさい」

えも しな 層 な意気込みだね、 いが、 一体どんなド 手 が え 0 ガラガンを持って来やが 顔を見 て (J ると、 この姿態っ つ 向 たんだ」 変栄

平

次はまだ庭から眼を移そうともしません。

のまま、

路 を 外 はず 地 で犬を したことも気が付いて居た 蹴飛 ば したことも、 ۴ のでしょう。 ブ 板を ハネ返 格子

親分、 縄張内 か ら謀叛人

が出たらどうします」

郎 は息を弾ませながら、 鼻 の 上 の汗を平手で撫で上げまし

た。

Ŕ 11 何 だよ だと 由比 の ? 正 雪なら牛込榎町よ、 今 の 世 の中 にそん な 丸橋 馬 忠 鹿 弥 なこと は 本郷 が あ 弓 る 町 だ、 P 0 縄張違 か 尤

平次はまだこん な 洒落を言 って e s る 0 で す

そ な昔話じ ゃ ねえ、 謀叛人が 生きて () て、 町 内 0 銭湯 で 毎 H

銭形 0 親 分と 顔を合 せるとし たら、 ど ん な \boldsymbol{b} ん で

() Þ な事を言や がる、 そ の 謀叛人は e s つ た i s 何 処の 誰なん

「金沢町の素読の師匠皆川半之丞」

何だと」

平次は起き直りました。

柄 ように で、 年 ば まだ三十 して か り前 e s る そこそこ に 引 0 越して が、 銭 の若さを、 来た、 形 平 次の第六感に 浪人者皆 何をす る 川半之丞、 で もなく 何 か 0) 美男 印 象を 世捨 で 人 め 0

ずにはいなかったのです。

言って も集めて 寺子は皆など 分、 " アレのたまわ そう 聞 断 く の غ 素読 わ 思 つ て 0 11 当 しまっ 稽古だ」 る で た 癖 ょ う。 K 子 夜 は 供 は 嫌 男 11 だ 兀 か Ŧi. ら

無 町 そ 内 0 若 か、 は 不 11 者が束脩を持 何 思議でな ع か 彼 とか言 e s に つ して って追 て頼みに行くと、 \$ つ 弟子は一人残らず他 払わ れ 家が狭 11 ع 所ゃ か 0 者で、 隙が

「フーム」

そ 0) S 뱐 弟子ども ع 緒 に 夜更けまで ゴ ۲ ゴ ŀ Þ つ 7 11 るそ

う ですよ。 謀叛人でなきゃ、 贋金造り、 そんなことじゃ あ りませ

ん か、 親 分

です。 K 取 ガラ つ ては、 ッ八の鼻 千 里 は 眼 少 し 順 風 ば 耳 か り 蠢ご で ح めきます。 の上もな ح 11 調法 0 鼻 な武 が ま 器 た だ 銭 形 つ 平次 た

贋金造 りに しちゃ、 暮しが楽じ Þ な e s 様 子 だ

だから、 謀叛人、 綺麗な顔は して いる が 飛 へんだ 大伴 の 黒 え え え ぬ し Þ

あ りませんか」

滅多なことじゃ天道様でんとうさま だか そ れに、 女房だ あ か 知らな 0 妹 のお京と 4 が、 の下に顔 いう 日 中は二人家 b の があんまり綺麗過ぎますよ。 出さねえ」 の 中 K 引 っ込んだ 切 ŋ 妹

それが П 惜 しか ったんだろう」

ッ お 察 0 通りと言い てえが、 謀叛人 0 妹 に 思 11 を か け

ちゃ 笠の 台があぶねえ」

ガラ ツ八 は 平賞で でピシ ヤ リと自 分 の 頸筋 を 吅 11 て、 ~ 口 IJ

を出 しま した。

じゃ、 どうしろと言うんだ。 11 く ら十手捕縄を預るこちとらで

も証 歴拠も引 つ 掛 りも な 11 者を、 11 きな ŋ 縛る わ け に も行く めえ」

そ は 親 分 0 働きで

馬 鹿 なことを言え」

隠 そ 砲 に は 遠島 あ の家 だ。 から、 そ れ だけでも ときどき煙硝 何 とか 0 な 匂 り 11 Þ が しませ するそうですよ、 6

待 待 て もう少 し考えて見よう、 う つ か ŋ 手を付け て恥を掻

11 ちゃ

ならねえ」

を感じ た様 子 でした。

した。 そ の 晚、 平次はガラッ八を つれて、 皆川半之丞の浪宅を訪ねま

一どな た様 で?

と目見るだけ 三つ指を突いて迎えたの のことに、 三晚湯屋 は妹 のお京、 の前を張 町 内の若 () のが、 顔を一

つ

ていたと

いう

ピカピ

力 する娘です。

妙にうら悲しさを感じさせる種類のものでした。 九、二十歳がせいぜいと思われる若さを、 e s 何となく貧しげな木綿物ですが、折目の入った単衣を着て、 ほど無造作な髪形、 **-それから発散される素朴な美しさは、** 紅も白粉も抜きの、痛々 +

御町内 の平次ですが、お目にかかって、 お願 () 申 し上げた

とがございます」

平次は精 () っぱいの古文真宝 な顔をします。

暫らくお待ちを

() たお女中が、 ス と引込む娘の お奥へ行くような気がして、 後ろ姿、 浅 間 な浪 宅が 御 後ろの八 殿 見え 五郎 て、 は ツイ

鼻 の下を長くします。

大したも のだね、 親 分

平次は袖を払 いま した。

間もなく二人は次の間に通されて、 ぬるい茶を啜って待 って居

ると、

「平次殿 では な e s か 改まっ て、 どんな用事だ」

蒼白 けて、目礼を交す顔ですが、鈍 面 とは縁 て自分の観察を整理しました。 主人の皆川半之 浪 0 唇 *()* 者と言 の遠 顔 のよく締 い男に見えますが、その代り眼の鋭 華^{きゃ} っても、 つ た、 丞、 な身体を見ると、 煙った まだ三十そこそこ、 いかにも い顔に、 い行燈の灯に対して、 知恵と意志を思わせる顔立ちです。 両刀は手挾んでも、 薄笑いを浮べて来ました。 よく湯屋や往来 い、鼻の高 平次は改め 武芸など 11 で見 細

いますが 外じゃござい ませんが、 一人弟 子 に 取 つ て 頂きた e s 間

はて?」

人間で で。 いたら少しは人間らしくなろうかと、 世間並のような顔をしていますが、 の野郎でござ -こんな野郎でも、 いますよ。 御 存じでしょう "子日く"をちょ こう思 からっきし訳 か、 いまし つ 八 たん ぴり教え 五 郎 0 解ら e s て頂 ねえ うん

に、 平次は こん な 後ろの方ですっ 調子 で頼み込むのでした。 かりむくれ て () るガラ ッ 八 0 顏 を 尻 目

「それ は 木 るな、 私は新し い弟子を取らな いことに 7 居 る ん だ

が

「でも、ございましょうが――

先々 「今来ているの へ跟いて来るから、 は、 みな三年越しの弟子ば 断わるにも断わり切れな かり、 11 引越 して行く

川半之丞はまったく困 じ果てた様子です。

そ 人目鼻を う 仰 Þ 明 らずに け て Þ 同 町 つ て 内 下さい。 0 誼は み、 な 御 ア、 面 倒 でもござ 手前え か *()* らも ま ょうが、 お

願 を しな」

工

八五 郎 は、 モゾ モゾと頸筋を掻きました。 あまり、 子 日く に気

0 乗 る 顔 ではあ りません

川半之丞は、 根気よく、 再三再 頼み込み、 四ことわ り Í し た が 平 経 次 は そ 頃 れ 押 つ

とうとう半

刻ほ

ど

つ

た

で

冠せて、

「それでは、 二三日来て見なさるが e s e s 最初 か ら大学や孝経

もあるま 41 から、 庭い 訓え 往 来でもやりま よう」

皆川半之丞の方から折れてしまいました

をい こうな わ ずに、 りゃ、 可ぁ |早陀羅 何だ つ 経経でも て構やしません。 何 でもやって 庭訓往来なん お く ん なさ e s て ケ チ な

ガラ ッ八は、 殺さば殺せとい った調子でした。

馬鹿野 郎、 阿呆陀羅経って、 奴があるか、 さん な解ら な 11 野

郎 ざ います、 何 分よろしく 願 います」

平次は、一所懸命に頼み込んで、 マゴマゴするガラッ 八を促れ

11 ず れ 稽古は明日 0 晚 から、 と言うことにして引揚げました。

たぜ、 親 分

出ると、 ガラ ッ 八 は 精 (J っぱ *()* 0 酢 つ ぱ 11 顔を し 7 見せる

0 です。

驚く が あるも 0 か、 11 だ、 つ か ŋ 学 問を て 置 が

学問は気が乗らねえ が、 あ 0 娘は毎晩顔を見せるか しら?」

それにしちゃ

馬鹿 野郎

そ 6 な役 得でもなきゃ、 十手捕縄御返上だ。 ~ 日 \<u>\</u> な ん か

持薬にするような、 悪い病はねえ」

黙らな いかよ、 -呆れた野郎だ」

丞 の浪宅を含む街の は しばらく黙 一角を、 つ て歩きました。 月に浮れたように 11 つ 0 間 に と廻りして Þ 5 皆 Ш 半之 いた

0 です。

右 隣 は長 崎 屋幸 右 衛 門、 左 は 川岸 だ

な家を振 め て 聳ぃ 平次は皆川半之丞 ゆる、 り 仰ぎました。 御金御用達兼神 の浪宅を押 田 し潰 両替組頭、 しそうに、 長崎屋幸 街 0 右 四 篇 分 門 の 0 豪勢 を占

長崎 屋 の お喜多も十九だが、 あ の 娘と比 べちゃ お 月 様 ع

す つ B ん だ

ガ ラ ッ八は外 の事を考えてお ります。

「そう言 ったものじゃあるめえ、 お喜多も町内で 五本の 指 に 折 5

れる娘だ、 あの娘が少し綺麗過ぎるんだよ」

娘や お月様は綺麗過ぎたって腹 の立 つも 0 じ Þ ね

何を下らな , , -ところで、 あの皆川兄妹に逢っ て、 何 か気 0

付 いたことはな か ったかい」

平 次は自分 の家の方へ足を向 けながら、 軽 11 調子 で 間 11 か け ま

した。

でも、 一二人とも あ ん な e st 0 やにお は、 舞台へ 上品 で綺麗だという外には 出て来る武家のようじ ね やあ ŋ ませんか」 同じ武家

平次は大変なところへ 眼をつけて e y た のです。 かったかい、

手が荒れているとは思わな

貧乏な浪人暮しで、 下女も飯炊きも置かなきゃ、 娘の手も荒れ

るでしょうよ」

ガラ ッ八は少しば かりセ ンチ X ン タ ル に な りまし た

娘はそれ で解るとして、 あ の主人 の手はどうだ、 あ ŋ

家や町人 0 手じゃねえ、 百姓か 職人 の手だ」

前にあの兄妹 ところで、 いろいろ面 稽 古 の素姓と、近所の噂を聞いて置くとしよう。 白 0 ć ý 始まるまでまだまる一 ことがありそうだよ、 日 少し当 あるわけだか つ て 見よう、 5, 頼むぞ、 その

「ヘエーー

11 見た 八五 郎 いな は両手を揉みました。 P のを感じます。 相手が 綺麗なだけに、 何 か武者 顫

=

「親分、驚いたの何のって――」

五郎 はまたドブ板を跳 ね 返して、 飛込みました。

俺 の方が驚くよ、 そう番毎格子を外されちゃ

平次は相変らず落着いて居ります。

「それどころじゃねえ、 今晩はどん な 事 が あ つ たと思 ま

すッ」

「変な声を出すなよ、馬鹿だなア」

将は あの 四五 皆川半之丞という、 人 の旧 い弟子と奥の 浪人者が教えてくれ 一と間に閉め 切って立て籠 る かと思うと、 ŋ 大

この温気にか?」

師匠は、 **ヘ**ッ、 ヘッ、 妹のお京さんだ。 教えて貰 った

書物はモー ギュ ーてんですぜ。 **ヘ**ッ、 <u>ヘ</u>ッ

大層むずかしいものをやりゃが ったな。 蒙求は荷が 勝 ち過ぎ

るだろう、少しは覚えて来たか」

「いいえ」

八五郎はブルブルンと長 i s 顎を振りました。

「一つも覚えちゃ居ねえのか」

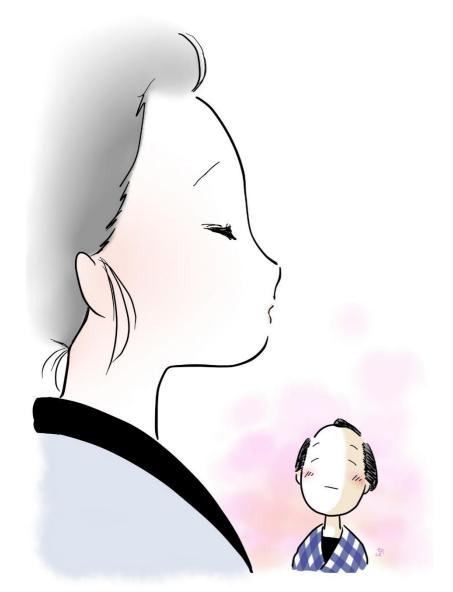
お京さん の可愛らしい 唇 の 動 くのを見て いたんだ。 とき

どき書物から顔を挙げて、 あ つ の目と目が逢うと、 ボ

たぜ」

馬鹿野郎」

空 耳 で聞 んだから、 モー ギ ユ だ って ヒヒンだって少しも驚



©2017 萩 柚月

ッ

かねえ」

牛 や馬 0 声 じ や ねえ、 呆れた野郎だ、 そ れ つ 切 ŋ

ギ ユ れ は つ 何 切 に り だ も覚えち つ た H Þ に Þ 11 ね えが、 + ·手捕縄 はば 返上だ。 か りな がら ね 稼業 親 分、 0 方 モ は

ちゃんとやりましたよ」

ガ ラ ツ八 は狭 (J 単衣で膝 つ 小 僧を包みな が 5 乗出 しまし た。

「何か聞出したのか」

丞と お 仲 隣 が 0 ょ 長 く 崎 な 屋 つ た あ 0 を、 の 万 両 長崎 分 限 屋 0 0 箱 主 人 幸 入 り 娘 右 衛 お 門 喜 が 多が 貧乏浪 皆 Ш 半 之

どは 以 て 0 外と、 生^なま 木 き を割 11 た 0 を 御 存 じ です か 11

「いや知らねえ」

銭形 0 親 分 P 情事に 出 入りに は 目 が 利 か な 11

ふざけ るな 探 つ た 0 はそ れ つ 切 り か

手 前 が 妹 に 教 わ つ て 蒙求を囀ずる 間 奥の ع 間 じ Þ 何を

やったんだ」

そ れ が 解 ら ね え、 素読 0 声 は 愚 か 人 0 話 声 b 聞 え ま せ 6 Þ

呆れた 野郎 だ、 娘 0 顔ば か り 見 て e s たん だろう

尤 b 人 0 歩く 音や 重 11 物 を引摺 るような音は 聞 え たように

思うが」

そ れが 謀は 叛ん 0 証 拠 K なる か P 知 れ な か つ たん だ、 何 だ つ 7 覗 11

て見ねえ」

実は 武 娘 が は 傍 そ に ん ひ な 9 卑 附 怯 な 11 て、 とを 瞬きする間も離 す る b 0 や れなか ね え つ たんで、 言 61 11 ッ

1

た

0

ガ ラ ッ 八 は 平ら 学で長 4 顎を逆撫 で て 居 り ます

手 付 け よう が ね え 晚 は 是 が 非 で b 奥 0 ع 間 を 見 る

んだ、 11 () か

ヘエ

娘 が 側 を 離 れ な き Þ 仮び 病が を 使 う か 調 子 が 出 な き Þ 横 9 腹

を突き 飛ば す ع か

で? 親 分

手^て誰 前ぇの 0 を 手 前 0 拳になっ で Þ る ん だ、 遠慮 す るこ は ね

驚 e s た ね

面 食 つ て 娘 0 横 つ 腹 な どを突き飛 ば す ん Þ な 11 ぞ 馬 鹿 野

郎 ŋ

ょ ゥ 工 今 H は 馬 鹿 野郎 Oı 食は 傷に だ。 ゆ う べ 夢 見 が 悪 か 9 た

ガ ラ ッ は 驚 11 7 飛 出 ま た。

用 心 ろ デ レ デ レ して 居 る と飛ん だ 目 に 逢 わ さ れ る ぞ

平 次 0 追 9 か け る声 に ガ ラ ッ 八 は bう 姿も 見えませ ん 昨 夜

0 尻 を 取 返 て 来 る 積 ŋ で ょ う。

付 0 が 玉 冷 浪 る 飯 日 食 が で て か、 月 う 触 た 皆 Ш れ 平 ح 次は 半 込 K 之丞 みだ か 皆 ع け Ш 半 江 11 戸 う 之 何 丞 侍 処 0 に は 0 0 身許を 家 相 偽 中 違 名 ع な で b 調 11 こと 解 御ご べ ま だ な た け 崩ず か は、 れ つ た 最 か 見 初 0 当 旗 は で す 本 中

気 が 0 皆 脈 Ш 商 半 0 筋 を引 か 丞 小 11 旗 7 に 本 集 11 まる ることは 0 奉 公 四 五 解 で 人 は り É 下 本 つ た 引 郷 が に か 調 5 下 た させ 谷 つ た ^ る か ٤ 日 け 7 0 探ん それ 索さく

では、 それ 以上 の事 は 見当も付きません。

わ をもみながら到頭三日 けですが こん な 時 は 鼻 残念なが 0 11 11 らそ 目 ガ ラ 0 れ 夜 ッ Ŕ に 八でも居てく な から つ て かい し ま 過ぎて寄り付 れると、 いました。 大 *()* かず、 に 助 か 気

親 分、 皆川半之丞 の 家 0 横 子に、 ح ん な \boldsymbol{b} の が 落ちて 居ま た

ょ

る夜 下 0 つ 亥刻過ぎ。 引 0 一人が、 小 さ e s 紙 つ 一片を拾 つ て 来た 0 は、 そ の また翌

一フーム」

りま それを読 した。 ん 懐紙に、 だ平次は、 消炭 煙^きせる での た 0 吸口 < 5 せ を 額 た 走 に当てたまま、 り書きは、 思 わ ず 唸

親 て 帰る、 分、 大変なことになった 外まわ りの土に気をつ ぜ、 け 明 Ħ て下さ はきっと、 鬼の 首を 取 つ

間違 ただら け 0 仮名文字、 ガラ ッ 名 題 ・悪筆に紛ぎ れ P あ

せん。

四

そ 幾度 っ切りガラッ八は帰らなか か使をやりましたが、 二晚 つ た 稽古 のです。 に 来た 皆 つ 川半之丞の 切 り、 あ 浪 宅 顏

を見せな (J -という素気ない挨拶です。

一方皆 にし 川半之丞のところに集まる四五人 調 べさせた下 つ引は、 思 いも寄 5 0 弟 ぬ 不 子 思 の 議 身許を、 な 事を 聞込 人

んで来ました。

黒門町 から来るの は、 小 旗本某の 用 人、 本郷三丁目 か 5 来る 0

母ば だ 以前 つ た 旗本 ح 4 某に使わ う 老 女 0 れ 伜 た小 者、 湯島か ら通う男は、 旗本

で訊 そ 0 旗 来 本 は 4 何 ع 11 う ん だ 愚 図 愚 図 ち ゃ 居ら れ な e s 大急ぎ

て

予 飛 大な危険 な た。 感 ばすように 11 法法え続い ع 若く は が で H す 頃 7 襲 イ 出 け が に e s 丰 b て か \equiv て 似 e s 0 た か 日 Þ 11 ぬ 消 あ、 0 つ 11 つ て た 息 平 せ、 で 次が、 し 平 居るよ を り、 次 ょ た 絶 は、 うで つ た こん う 深々と す な気が ガ ラ な 下 分別顔をする ッ 腕を拱 して、 八 つ 引を二三 0 身 さすが 0 () 上 て考え 人、 に 0 に不 は 込 滅 何 尻 吉な みま 多に を 蹴

です 居 時 差 来さえす < を るような気も 代 見透せるような気がしますが 併 は 証 の 全^ぜん 疑 拠 れ 間を織 貌ら ば、 b 簡 何 は 単 に しな 何 に もな P 皆 り出して居る綾糸は、 前 彼も Ш 11 身や身 半之丞 し ではありません。 に縛るわ <u>~</u> 分を洗う ん 0 素 にほぐれて行 姓 けに行かず、 く が 工 ら浪人でも、 判 夫も そ りさえすれ 一箇所から繰 の つかなかっ 大本を衝、 < 寺に戸籍 0 か 歴とした二本 b ば 知 くことが出 り出され た れ のあ わ け ·です。 った b 7

弟子 位 が \boldsymbol{b} あ つ は 少な 達 りま く り 0 で 出 せ 集まる様子 せ 6 b ょ う。 四方へ る が か 困 睱 bつ にあ は 飛ばした下 知 たことに、 なく れ かし な て詮索を それを跟けて、 0 で この二三日、 つ 引が た。 帰 たら、 って 来 皆 巣を突き止 疑 Ш れ 間 半之 ば、 0 旗 丞 何 本 め 0 る か 0 手で 名 目 段だ

は ガラ ところで、 ッ 八 の下手な仮名文字が浮びました。 土に気をつけろ とは 何 のことだ) 平 次 0 胸 15

それ 頃を れ が ま る 早 せ 選 廻 に 0 11 を憚る かも りま つづ ら考えたところで、 これ で く自身 知れ るように、 た 皆 は矢張 川半之丞 な 番や e s り、 翌る 小 あ き な 0 ガラ そう思 ح 日 の さ 0 11 ッ 早朝、 謎 0 () 八 浪宅か 店 11 の文句ば の 付 手紙 0 まだ街 あ いた平次は た 5 0 か りを当 通 長 0) り り、 往 は 崎 ても 来 外 解 屋 人 0 廻 りそう 0 大きな構、 なく ろ に り を見 < 顔を見ら あ な る ル 方 り

-おや?」

潮 売 違 見 く 0 口 気ゖ 物 ボ ったも 土は点々 なも 0 口 とこ 少 ら 荷 そこに ので、 江 のが や もな 戸 て、 として、 草鞋 ぼ れ は苫を掛け 0 平次 うん 往 て で ユ 11 ラ 来 運ん () ところを見ると、 る、 と空気を含 の注 の 馬ョ 川岸につづきました。 ユ ラと で を船 糞さ 来た、 意を捉えました。 真黒な土 岸を ع が 砂 嬲な 隻、 んだ真っ黒な土くれですが 利 田 を で って 舎の す。 ね 八百屋や近在 居 人が ŋ 土でな 堅 り つまみ上げて掌で ます 踏 居ると 崩れた石 め たような み堅めた往来 e st ことも P の百姓衆が 見えず、 垣 土 の 明 上から覗 砕 は ^ で 全 肥 上 ボ 料 商 て

がこ 丞 であ 付 け 平 る 次は を指 こと 思 同 でし じょ あ わ す ず声を出 た の う だ ょ り を う。 な つ 見 土 たら? P が や すところ りま ぱ ガラッ 1, た。 で 平 苫 次 八 た 0 は の 中 0 思 手 船な に わず伸 紙 端た \boldsymbol{b} K 多 に 書 分そ は 上 () て れ 先 つ あ 刻、 7 が 皆 積 Ш み 街 半之 込 で見

富 を 視 い野を遮ざ 護 る た ぎる め に 抱え 0 は 長 7 【崎屋 置 < 0 ع 巨大な e s う、 棟ね 人 の 浪 そ 人者 の 下 0) に 住 は W 巨 で 万 る 0

離室も見えます。

五

そ 0 時 で た。 急 に 街 0 空気 が 騒 が な つ た ع 思 う間 b な

親分、 大変 ッ、 殺されましたよ」

め たよう 下 つ 引 な 0 勝が 小 さ 飛 11 身体ですが、 ん で来ました。 ガラ 鋳がかけ ッ 勝かっ 八 な ع どよ 11 う 中 ŋ は 年 物 男 事 で が 敏 乾 古

「誰が殺されたんだ?」

運びます。

浪 人者 0 妹 で すよ、 お京さんと言 つ た、 滅湯 綺 麗 な の が

「えッ」

13 平次は ŋ 飛 は 上 が 女 0 り ま 児 が `` た。 美 岡 11 つ 引 人形を取落 とし て異常な事 て、 微み 件 塵し 臨 に 砕 む 緊張 ع

の心持です。

二人は 宙を 飛 びま し た。 皆 Ш 0 浪宅で は

「お、平次殿」

さすが に 真 つ 蒼 に な つ た主人 0 半之丞が迎えてく れます。

「お妹様が御災難だそうで――」

見てくれ、平次殿」

美し 皆 か 半之丞 つ たお京は、 0 案 内 で 紅も 絹ャ 裏 0 廻 ると、 と束のよう 狭 11 庭 に の 碧[^] 植 血っ込 に 0 蔭 染ん に でこと切 さ b

れて居るのです。

「これは?」

平 次もさすが K 胸 が 塞が りま た。 Ш 一を失い 尽し て、 真 つ 白

に

か

も思 な と太刀 つ た小さ ぬ冷 左乳 た 4 顔は、 ζ 美し の 下 打ち砕かれた人形 へ突き抜けるほど 11 b 0 です。 傷 は 後ろ の凄まじ のような、 か ら 浴ゥゥ () b 衣^が 越 ح **O**. 0 世 に の 0) た ع

お心当り は、 皆川様」

何 に もな 4

半之丞 は 固 く口を緘みました。

Ш の ん 疑 ま った様子 では夜中前のようですが」

「そうかも知れ 今朝起きて見ると、 ない、 が、 縁側の戸は開けたまま、 私は早寝だから、 何にも知 5 な か つ た。

朝陽がさし

込ん

で 居たが、多分、 妹が朝の支度でもして居る事と思い込んで、 う つ

か り時刻を過してしまった」

そう言う皆川半之丞の顔には、 夕立雲のように 深刻な悲 みが

去来します。

人に怨まれ るような お心 当り は ?

無い

半之丞 の 調子 は少し剣も 朩 口 口 です。

そう申 て は 何 で す が、 御 妹様は 0 御 きりょ う で、 さぞ

何彼と言う人も多いことでございましょう、 殿方との お噂 など

は ?

飛ん でも な 4 ` 妹 に 限 って、 そん な馬 鹿 なことが あ る わ け は

√√

半之丞 0 П 調 は 激き 越っ でし た。 言 11 知 れ ぬ 忿怒が サ ッ とそ の 秀

麗 な 顔を染 め る 0 で た。

もう 7 伺 11 ますが、 御妹様 は、 旦那 لح 本 当 0 御兄妹 で よう

「 ウ ム 」

むず か くうなずく 半之丞 を、 平 次 は もう 追及する 気 b な 11

様子です。

恐 れ 入 ŋ ます が お 家 0 中 0 様 子を見 せ て 頂きます」

「それは――」

も寝 裏を見せ か か 5 ガ 引 な 留 ラ か が め ッ そ て、 八 ったことが つ うに ح て居 淋しく する 緒 りま に 通され した。 皆川 敷き捨てたまま、 一と目で解 半之 入 た 部 丞 \Box ります。 屋。 の三畳 0 様子 そこ 枕 に に そ 構 0 お京 れ 脹らみ具合で わ ず、 に 隣 0 床 平 る 六 畳 は 次 紅 は は、 は、 P 11 う 木 綿 11 度 側

う。 た。 主人 0 奥 0) 0 不満も、 部屋 は、 皆 知 川半之 5 ぬ 顔 丞が に、 平 特 別な弟 次 の手 は 子 ,達を サ ッ 通 ع 唐 す 紙 場 を 所 開 で け ま ょ

何 ん に そこ で あ P な は るだけ 六 畳 で 主人半之丞 0 す。 ょ < 片 附 0 11 床 た が、 部 屋。 部 屋 平 次 0 隅 が 期 に 片寄せて、 待 たよ う ザ な ع 積 は

苔ゖ を 縁 種 驚 側 平 0 9 立 無 b< た さ つ 11 て見 れ す 0 が は、 で が 不 ると、 にそ た 狭 思議と言えば不思議です。 れ 13 庭 裏木 以 のあちこちに、 上 戸 は 遠 ^ 通ずる庭がよく踏み堅 慮 な け 撒ま れ 11 ば たように それよりも平次の な り ませ 散 め ん つ ら で 7 た。 眼

て ŋ 0 家 ま 0 中 た が、 を b 庭 っと 0 死体も よく 捜 そ 0 た まま ら? に 平 次は、 て、 さすが そ W に な 家探 事 を考え

なり兼ねます。

お 知 合 の方 ^ 人をや りま ょう か 皆

Ш

様

平次は見兼ねて注意しましたが、

「いや、江戸には格別の知合もない」

半之丞は、 冷た く 言 e s 放 つ て、 妹 の 死体 の 側に、 検^ゖんし の 済む 0

を待っている様子です。

持 を しょう。 恵とを持 に 観破 も不思議なものに眺めて居りました。 った顔 大きな悲 することだけは平次も です。 それは、 っているらしい、 しみ 0 去来する、 平次が嘗て経験したことのな この皆川半之丞 ح 断 0 念 上もなく しなけれ ひ弱 の秀麗な面か 冷 た () ばならな 肉 i, *()* ,体と、 顔 複雑な深さを を、 か 5 逞^{たくま} 平 つ たで 秘 は 密 知 世

ŋ が 達が、家主や月番を先に立てて、 の 間 不思議なことに、 もなく もた った一人も顔を見せません。 検屍が済 ん で、 毎晩集って来た、 死体を部屋 何くれと世話をしてく の 中 半之丞の弟子達も、 に 運び入れ、 れました。 町 内 身寄 の

皆川様、 番所までお越しを願 います」

です。 思案に暮れた平次は、 家 から皆川半之丞を追 最後の切札を投げました。 い出して、 存分に調べて見たか た つ た半刻、 つ

「それは誰の指図だ」

半之丞の顔は冷たく引緊ります。

何彼と手間 マそ 0 方 が 取 早く つ ては、 型がつきます、 御妹様 0 仇討も遅れ 御奉行所 る道理ではござ 0) 召 出 しを待 つ て、

勿仁義 区

ん

か

平 次の 平次は 方も今日 所 懸 命 0) 日 で に間 す。 に合 町奉行や、 いません。 与力の そうかと言っ 指 図を待 って て、 e s 相手は ては、

身分あり気な二本差ですから、 引っ括 って行って、 存分な家探し

をするわけ にも行かな か つ たのです。

無用だ。 私は知って いるだけの事は皆な言ってしまった」

でも

「私は葬い の済まぬ うちは 妹 0 死 体 を独 り ぽ つ ちに た は な

妹様も浮ば

れ

な

(J չ

e s

うもの

で

しょう」

「でも、 下手人を挙げなきゃげる。 な りませんよ。 敵を討た なき 御

「下手人を挙げさえすれば、 この私に格別な用 事 は な e st の ·だな 」

「それはもう、 仰しゃる迄もあ りません」

平次も、 ツイ 斯う言 (J 切っ て しまいま

「それなら一向 わけはな いではな e s か

下手人 は 解 つ て e s る。 名 札 を 置 11 て 行 つ た b 同様 だし

?

銭形の平次と言わ れる者が、 ح れ ほ ど の 事 が 解 5 な 11 筈は な *(*)

平次は 眼 を見張 りました。 恐ろし 4 挑戦戦 です。

あれを見る が e st 4

半之丞 0 指さし た の は、 お 京 0 死 骸 0 横 た わ つ て 11 植 込

みの 真上に冠さる長崎 屋 0 土 塀 で た

飛 んで行 つ て見ると、 そ 0 土塀 0 上 のかわら に は、 真夏 0 陽 乾 11

7 ッ 血 潮

平次も今は 句もありません。 皆川半之丞をここか ら追出 して、 ら

飛

ん

で出ま

た。

ガラ とに ッ 気 八 が の 付 安否を確 か な か か つ た めることに 0 です。 気を取られ、 た つ たこれほど 0

躑° 死 躅° 骸 証 昨夜 拠だ を 0 体を 投げ 枝が 誘き出 込ん 折 れ だ て、 した の 生^{なまじめ} だ。 曲 者 六 ŋ 尺 は、 0 土 0 土 長 に 塀 深 崎 0 屋 型 0 庭 に 0 附 附 で 妹 4 11 を た た 殺 血 0 害 ゃ などは、 U 塀 植 込み 越 そ に 0

黙 0 叡な つ 恐 知が蘇えい て ろ しま 4 () 半之丞の ります。 ました。 明察、 が ゃ が て、 平 次はお株を奪 心を落着けると、 わ れ て 平 次 ば 0 H ら 頃

下 手人は 左利きの男、 力 はあ るが 武家 で は あ りませ ん

と平次。

長崎屋 れ ーそ だ。 の 通 へ行 分まだ刃物を持 りだ。さすがは平 って、 左利きの つ · 次 殿、 力 て () 0 強 る それに一 かも知 4 男を捜すが れな 点 0 間 11 違 11 *()* b 下手人はそ あるまい

直 皆川半之丞 に乗り込ん の言葉を後に で行きまし 聞 *()* て 平 次は 長崎 屋 0 裏 П か ら 真 つ

六

何 ? 岡 つ 引 が入 つ て 来た? 左利きの 力 0 強 11 男 が 11 な 11

かと言うのか」

長崎屋 れ な に ら 拙 ゴ 者 口 ゴロ だ、 し ح 7 0 伊い 11 坂☆ る 浪 権ごん 内ない 人者が二人、 左 利 き 0 事 上 あ れ か 人 力 だ と裏口 か

お 武家方じゃございません、 奉公人のうちに、 そんな人は いな

いでしょうか」

平次はおくれる色もありません

「あったらどうする?」

と伊坂権内。

「番所まで来て貰います」

一 何 ? _

昨夜庭の 隅 で 人を殺 土塀越 隣 ŋ 0 庭 投り 込 6 だ者 が

あります」

した。

の浪 人者も、 事態 0 容易な ら ぬ 0 に 黙りこく つ て しま e s ま

左利きで、 力 の強 い奉公人に違 11 あ りません、 あ ッ あ 0 野

21

郎だッ」

寄 って来た人垣を抜 けて コ ソ コ ソと逃げる若 () 男、 平 次はそ れ

を見とがめて後から追 いすがりました。

親分、 私は 何 に b 知りませんよ、 飛んで bな 11

伏せ、 そう言 繰 り出す早縄 いながらも必死と反抗するのを、 が、 蛇 のように若 い男 0 引っ倒して 両手を後ろに パ ッ 縛 吅 り上 き

げます。

利吉、 とか言ったね、 神 妙にする が *()* 11 裾 血 が 附 11 7 11

るじゃないか」

「えッ」

ッ ハ ッ ハ ッ、 そう言わ れて、 自分の裾を見るところが正直だ、

番頭さん、 ح の男の荷物を見せて下さい」

工

言 ま 老番 e s 付け た 頭 て 0 太 八兵衛 奉 公 人 もど 0 う 部 屋 すること か 5 b 古 出 11 竹け ま 行う 李り せ を一 ん。 不 つ 持 承 不 つ 承 て 来 下 させ 男 に

10 行李を開 晴 縄 着 付 0 そ 手 け て、 れ 代 利 に 少 サ 吉 を、 ッ ع ば 目 か 飛 を ŋ ん 臍~ 通 で く しま 来 た ŋ 下 0 入 た つ 引 つ た 少 に し 預 財 布 乱 け 雑 た 平 そ に 入 次 0 下 れ は た に 仕 は 手 着 早

お

Þ

見た 宛 た ど 名 書き損じら が は 皆 対言 気 な 葉 が お とが 嬢 で 様 e s め 思 手 紙 て 11 出さな 0 が 利吉より、 七 丈けをか 八 本。 か つ き口 た とな 々 0 説 < で つ り 11 7 V た紋切型 ょ 居 う。 ろ り げ ま て す。 見 0 多 \boldsymbol{b} る 分書 ٤, 0 ば か た り、 ど て

11 つ は ح 0 男 0 筆跡には 違 11 な 11 だ ろう な、 番 頭 さ 6

工

て お 突き り ま 付 けら た れ が た手 Þ 紙 が を、 て手代利吉 老番 頭 0 0 書 太 兵 11 衛 た b は 杲 0 気 に 相 に 違 取 な 5 れ 11 7 眺 め

めま た

手が対 Þ が は つ 言 た ろう、 4 寄 つ 太 て 11 弾 野郎だ」 か れ た 意い 趣し 返 に お 隣 の お 京 さ ん を 殺

で ら 脂 け 平 な 切 次 顔 は 2 を ح て 憎 0 造 々 何 ع 化 も言 < 0 見 傑 作を台 11 P ょ りま う 0 無 た。 な に 11 無気 ま だ二 た 味 冒ょう な 十 三 三 瀆と とこ 的き な ろ で 男 0 0 あ ょ う。 る 若 丰 者 魯の 鈍んだ で

`

違 11 ま いすよ、 親 分

す

さ 弁に 解け を ても 追付 め え、 素直 に 申 上 げ て お 慈悲を 願 え

違 います、 そんなわけで殺したんじゃありません、 私は、 私

は |-

利吉はシクシクと泣き出しました。

ような馬 何を言やがる。 鹿に見込まれた 人一人洒落や道楽で のが、 お京さん 殺せ 0 」 因果だ」 だが るわ けは ねえ。 手前

|親分」

「何が気に入らねえ、馬鹿野郎ッ」

違 いますよ、 お嬢さん、 たった と言、 何と か 仰 Þ つ て下

さい、私は、私は」

送っているのでした。 11 bあら の 、 ぬ 方を見る利吉 長崎屋 0 娘 0 のお喜多が、 視線を追 つ て行くと、 そこから凍 物蔭 るように に チラ IJ 視線を と白

「あッ、成程そうか」

平 次に も事件の成行が次第に呑込めます。 利吉 0 手 紙 0 宛 名 は、

殺されたお京ではなくて、主人の娘お喜多だったの です。

言 「お嬢様、 やさし い言葉をかけて下さい、 私はお処刑になっても本望ですが、 お嬢様、 お 願 € **√** たっ た

ع

未練男 の焼き付くような視線に追われ て、 お喜多は ッ 1 と身体

を隠しました。 バタバタと、 縁 側を遠ざかる跫音

「お嬢様」

それを見る利吉 0 眼 からは、 ۴ ッ ح 涙が湧きました。 ピ リと

鳴る縄尻。

「野郎ッ、歩けッ」

下っ引のダミ声が威嚇的に響きます。

夕 光 ŋ が 明 神 様 0 森 に す つ か ŋ 落ちて しまっ た 頃、 下 つ 引 0 鋳い

掛勝が帰って来ました。

「親分、解りましたぜ」

「何が解ったんだ、勝」

あ 0 浪 宅に集まる 0 は、 八 千 Ŧī. 百 石 0 旗 本 で、 駒 込 屋 敷

る、 永 井 和泉守様 0 縁故 0 者 ば か り ですぜ」

「しめたッ」

ら行方不しれ 小永 和 知 ず で、 泉守 様 は二 年前 に 亡く な り、 跡と 取り 0 鉄三 郎 様 が 三 年 前 か

主 同 様 に 振舞 今は つ て 和泉守 11 ・ますよ。 の遠 平 *()* 馬様 伯 父平 0 子 馬 様 0 平 ح 太郎 e s う と 0 が 11 う 後 方 見 格 が 跡 で

日相続するそうで――」

そ 4 7 は 有難 11 ところで、 皆川 半之丞と e st う 0 は、 永 井 和

泉守様の何だ」

そ が 解 ŋ Þ 何 \boldsymbol{b} か b 片付 が、 それ だ け は 解 り ま せ 6 ょ

Þ b う と息探 つ 7 れ 皆川半之丞兄 妹 0 身許だ、 兄

妹じ な 11 俺 は夫婦だろうと思うが」

「~エー」

「大急ぎで頼むよ

「それじゃ、親分」

11 ح 待 つ てく れ 手前 は 町 内 顏 を 見知ら れ て 15 な か 5

この手紙を投り込んでくれ

そう言いながら平次は、サラサラと一

通

り 皆川 半之丞宛 で す ね

永 井 か 5 P 出 た ょ う に てあ る。 ح 0 手 紙 を み Ź 11 か な

エ

皆川半之丞で

刻は家を

空

け

るよ

掛 勝 は 独楽鼠 0 ょ うに 飛 ん で 行 きま た

う 11 そ ŀ か ッ ま プ 5 IJ せ 煙草を二三服、 黄 た そ が ん れ て、 大 懐き 中提 て 忍 ば 灯え な 0 用 く 意 ع \$ をし て 人 外 に 顔 ^ 出 を ると、 見られそ 幸

掛 P ほ 0 بح 紙がみ 敷 け で れず、 畳 をほ れを は る 川半之丞 0 込 ょ 納 ぐ う。 戸 ん H すと、 楽々 で、 で ŋ 頃 11 きな あ 過 の浪宅 0 ります。 ع 落着 床板 外ず 往来 り裏木 て、 に いた様 0 近所 Þ て そ は 中 戸 多分こ 何 つ 庭 ح の方 に 0 ^ 子もなくせ 網 滑 に 変 踏 込 あ り込ん を張 の ŋ に 渋 みま 向 \boldsymbol{b} つ 以紙を敷 あ たような土 いた厳重そうな格子 つ て した。 りま だ平次。 か e s せかと出て行きました。 せ る 11 ٤ て λ そこは三畳 <u>ー</u>つ 何 が が、 間 か 隅 ザ b0 0 ラ 部 な 作業をする に 窓 ザ 片 ば 屋 当 ラ 寄 か する 手 は せ 0) ŋ 半 を た 眼

下 た。 平 真 次 は懐 中 つ 黒 は な穴が 中 間 提 灯 0 押 K 地獄 入 明 りを 床 0 入 板二三枚は 入 れ П ると、 0 よう 手 に __ 方 に 口 を 従 0 開 板 つ きます。 戸 て 剝は を が サ さ ッ ح れ 開 そ け ま

り、 は 粗 は な 何 に 横 が の 躊躇 ^{ちゅうちょ} ら 頑 伸 丈 び \boldsymbol{b} な な て 段 く入 居 々 ŋ ます。 が つ あ て 行きま つ て、 た。 間 ば 穴 か は ŋ 降 三尺 り 四 方 ば 今 度

せ λ で とす た。 る 土 長 崎 0 匂 屋 11 0 Ŕ, 方 気味 五六間 な暗さも、 \boldsymbol{q} 入 つ て行 bう 平 次 を 牽が 何 制は ら行 ま

手に蠢くもの――。

平次は ハ ッ と立止 つ て、 懐中提灯を突き付けました

「八じゃねえか」

僅 変り果 か 敷 て 11 た筵の た姿です 上に、 が、 ガラ 滅茶滅茶に ッ 八 0 八五 縛られて 中郎に紛ぎ 猿轡に、 れ b あ \boldsymbol{b} りません。 及ばず、

かり光らせて居たのです。

声を立てる気力もなく、

ガラッ八の八五郎はピカリピカリと眼ば

ガラ ッ 八 の 顔 は 激情 に歪んで、 \Box が 声も なく フ 力 フ カと動きま

した。

「確かりしろ、八、もう大丈夫だ」

平次はそ の縄を切 ŋ ほど て、 赤ん 坊を抱くように起し ŋ

ました。

「親分」

「何だ、八」

ひどい 目に逢わ Þ が つ たぜ、 畜生 ッ

ガラッ八はこう言うのが精一杯です。

「どうしたんだ、 大急ぎで話してく れ、 0 穴は 何処 ^ 行く

んだ」

「長崎屋の金蔵だよ、親分」

「謀叛人じゃなかったのか」

川半之丞兄妹は、 あ んな優 11 顔を 7 () るく せ に 大 泥棒

だし

マそ つ は 知 5 な か つ た、 大泥棒 なら話 は 早 4

平 次はガラ ッ 八を助け起 して、 狭 11 穴 0 中 ながら、 どうやらこ

う やら引っ 担ぎました。

無礼者

不意に、 穴一パ イ 0 霹~ 震き が響きます。

半之丞。 に物見せん ッ ع いつ 構え て 0 提 です。 間 灯 に帰 を差向 つ たか、 け ると、 刀の鯉 出 を 口を切っ 塞 11 だ の て、 は、 主人 近寄らば の 皆 目 Ш

蒼白 顔 は 激 怒に 顫えて、 爛と した 眼は、 中 腰 に な つ た 平 ·次と、

その背に 負 わ れ たガラ ッ八を睨み据えます。

泥棒 ع は 何 事 だ、 皆川半之丞、 人の物をか すめ た覚えは な

11 ぞし

だろう。 銭 形平次とは言わさんぞ」

待って下さい、皆川さん、

偽手紙

でお

びき出

して、

他人の家に忍び

込む、

そ

0

方こそ盗

-こうでもしなきゃ、

八

五

郎

を助け

る工夫が な か つ たんだ、 差当り泥棒でな い と う言 e s 訳 そ

11 つを 伺 お うじ やあ りませんか」

平 次も 屈服していません。

言 い訳 などは大嫌 11 だ

ŋ 切 る半之丞。

この穴は長崎 屋 0 家の 下まで行ってますぜ、 土 地 0 下

だって他 人 の地所に 違 e s な 11 で しょう。 それでも言 11 訳 が 無

用だと言う ん ですか 11

次は少し反抗的 になりました。

成程、 そう言えば 一応尤もだ、 それでは冥土 0) 土産 に 聞 か して

賊

け Þ ろう は こう だ 皆 Ш が、 同 志 の手を か り て の 穴 を 掘 つ た わ

す 心 細 穴 0 61 上と 灯 0 下、 中 に 地 孕は 獄 む 0 殺 入 気 b に そ 相 0 対 まま た 不 ょ 思 う 議 な 三 な 物 人 語 は を 始 懐 中 め 提 灯 で 0

八

を尽 他た 種 う . ア_い 平 0 駒 次 そ た 込 は が 郎 0 0 11 後 ろ 様 旗 そ 本 は ^ 11 ろ \equiv 伯 0 探な 所 年 千 父 前 索さ 在 **H**. 0 平 百 を 0 十 馬 解 八 石 た様 歳 殿 5 永 が ぬ で まま、 入 行 井 子 だ 方 和 つ て 不 泉 か 守 5 後 和 知 様 泉守様 見 に 大 し な 0 方 御 5 て 跡 居 は 0 れ 嘆き 見 ら た 取 当 れ た は る 0 11 う 付 ろ つ ち た 11 だ 手 ろ 粒 御ご

ま あ 重 長 13 な た 千葉 囲か こう言う皆 が 0 11 を を お 0 探 作 京 領 フ 地 ۲ ŋ ŋ ع 当 相 に Ш 親 た 談 て 11 半之丞 類 た ことから て て、 0 っ遍狂人 江戸 は と $\epsilon \sqrt{}$ 屋 年 年 う 敷 前 を 万 越 預 両 0 に 0 は、 ح 分 顔を見 つ 限 ع て 若 用 長 主 で 11 る 崎 人 知 人 た。 鉄 Ш 屋 つ \equiv た 波 0 11 郎 者 Ŧi. う 土 六 蔵 名 0 0 義 な 行 0 0 子 で 中 方 11 隠 を 0 を 捜 弥 厳 て

を、 和 み 泉守 ま 恩 長 崎 が そ 遺子 あ た 屋 当 が は る 鉄三 元 時 0 長 長 そ で 一郎を 崎 崎 れ が 奉 平 0 隠 行 露 商 馬 顕ん人 0 0 で、 頼 役を て みを断 厳禁 平 馬 す で 0 て 0 わ 永 に 抜 11 ŋ 井家乗取策 た、 磔り け 兼 荷 刑け ね を 永 に ` P 扱 井 悪 平 な 9 事 馬 る て の片棒を担ぐこ 巨 に べ 知 き 救 万 り わ 0 0 ながら、 富 れ を 積 そ

とになったのです。

決 ら 出 平 五 ば 百 て あ 子 石 改 る を 平 め 相 太 て 0 郎は 違 将 で、 軍家に な 評定所 当 く 下 年 十七 され 御 0 目 歳 ることになるで 見得 調 べ が 永 の上、 済ん 井家家督 で、 近 () 鉄三郎 相 う 続 ちに 0 届 が P 生死不 を 跡 目 年 相 前 か

事態は急迫しました。

人ま 鉄三 る 郎 で Ш 半之丞 雇 b を 出 盗 つ · 来 ま て み あ 出 0 せ る す Ш 上 ん 波 ことを計 0 一弥 警戒厳 は 画 重を 長 崎 ま 極ゎ 屋 た め 0 て、 が 隣 0 非 腕 家 力 を つ 節 か 0 0 ŋ 受 弥 強 け、 で 11 浪 は 最 どうす を二 初 は

利 出 な 0 吉 女房 させ た び 続 き寄 の を 11 煽せん を覚 よう て、 で した。 せ、 動き としましたが ら 長 れて 崎 庭で て、 屋 刺 ` 鉄三 0 驕慢な 娘 し 郎 殺 お 喜多 救 妹 (J お 出 喜 ع 0 浮 土 し 多 触 塀 0 の れ 気 手 越 妬と 込 心 心ん 引き ん を し だ を 嗾そ に 投 煽ぉ をする お つ り込むよ り、 京は て、 ح 少 囲 騙だま そ 61 賢こ う 0 0 実半 なことを て 鍵 お を 京 之永 な 盗 を み

p' 来 な 井 0 た 5 0 古 面 うだ だ 目 条は な 掘 触 れ ŋ 11 そ 込 抜 拙 れ んで、 者 尤も をどう 畢ひっ と 用な 11 毎 う 0 日地下 始末 過ち、 方では、 時 してよ そ に穴を掘 0 人 永 手 八 **H**. 井 1 に 家縁 P 郎 掛 り 0 つ つづ 故 か Þ て 相 5 0 け 平次、 同志 果 が弟子 て あと を集 た 入 お 妻 前 に ŋ め 両日で、 対 0 思案 素読 して

「卸尤もで、皆川策」

Ш

半之丞

0

頬

に

は

苦

笑

11

が

み

淀と

「御尤もで、皆川様」

た

ら ح 打 ん は ち もう な 抜きさえ 邪魔が入っ 主 君鉄三郎様 にすれ た ば 0 何 用 0 苦 e s の P 下まで行 なく 救 11 つ 出 て せ 居る。 る のだ 床 板を下か そこ

は 7 大 申 ょ 目 附 ま 解 せ り へ訴えて出 ました。 ん が そ 皆川 れ ら れ ほ ど 様 な 相 4 0 手 御 で 心 0 す 悪事 持 が __ 判 々 御 つ 尤 て b11 る な 決 ら、 7 無 う 理

平 次 は 最 後 いの疑問が を投げ 出 した の で す

永 井 東照宮様格 別 0 思 召 で 八 千 Ŧi. 百 石 を下 置 か た

永井家が、 断 絶にな つ てもよ いと言う 0 か

か 同 11 ま 志 9 た 無 四 事 が <u>F</u>. K は 表 人 そ 鉄三郎様さえ救 沙 命を 汰 0 為だ」 に 惜しむ者は な れ ば、 善悪 41 な 出 11 と せば、 が b に 斬 永 何とでも弁解 込んで御府内を騒がさな 井 家 の 立ち行 の道 く道 は は 立つ、 な 11 30

が、 こうし て いるう ちにも、 平 馬 0 子 平 太 郎 0 御 目 見 得 が

済 Ĺ で しま つ て は、 六日 0 菖蒲 だ

之丞が うとする 0) 御 目見 平 0 次と は 得 無 理 八 0 五 日 0 が、 郎 な を斬 いことでし 三三日 つ て の後に しまっ た。 迫 7 b つ 7 ここ 居 る で鉄三郎 0 で す。 を 皆 救 Ш な

でし 地 夫 11 婦 0 0 忠義に う、 では 地 解 0 ŋ 底 そ ま お手伝 ん 0 穴の た。 なこと 番今晚 中 e st なら、 に しましょう」 一と晩だけ あっ 御助勢は出 しはお上 お 上 0 `` 来ませ お目こ 土龍 0 御 の真似をして、 ぼ 6 用 が、 を勤 b 天道 ある め る 様 身 皆 体 0 届 で かな 様 大 御

平次は大変なことを言い出しました。

「本当か、それは?」

「八、手前 は 穴 0 外へ 這 11 出 7 待 つ 7 居ろ。 皆川様 サ ア、 御

案内して下さい」

「親分、そいつは」

驚 いたの は 八五郎です。 下 へおろされて、 あわてて平次 0 裾を

掴むのを、

配 するな つ てことよ、 手前 は 限を つぶ つ て り Þ £ \ 11 だ、

俺は皆川様の 御人柄 に惚れたんだ。 安心して待って居るが

「ヘエー」

「平次殿、それは本当か」

半之丞も少しつままれた心持です。

本当も嘘もありゃしません。 それで悪きゃ十 手も捕 縄 も返上

ますよ、 馬 鹿 の利吉に殺されなす った、 奥さんが 可哀想だ

その代りあっしが手伝って上げます」

有 難 () いずれこの 礼には縛られてお前の手柄 に ょ ۯٙ

飛 ん でも な , 穴を掘って縛られた日に は、 日 本 中 0 土能の は

しが立たねえ」

同志 も世間を憚 か つ て来ず、 _ 人 で は あ 0 床 板 を 破 つ て、 見張

り 浪 人を 押え 鉄三 郎様を救 11 出す工 一夫がな か つ た の だ。 それ

では頼むぞ、平次殿」

皆川半之丞は涙を拭いて居りました

「さア」

「行きましょう」

穴 の中を用心深く進む二人。 その後姿を見送っ て、 ガラ ッ 八 は

しばらく口も塞がりません。

「チェッ、物好きだね」

×

X

その晩。

江 相 明 0 か ら 続 奥 戸を追 ら れ H 長 を ま 願 居 \mathbb{H} 将 した 屋 Ĭ, た 放 軍 11 0 ح 出 御 雇 さ 永井平馬の 目見得 浪 れ で、 () う かし、 るこ 和泉守 後見人永井平馬 とにな ح 伊 事 坂 () 件 業は う 一子鉄三郎が江戸に立還 一子平太郎が、 時、 は つ 何 た 斬 三年前 b 0 ら は、 です。 かも れ 神隠 闍 家 用 永井和泉守相続人として、 事 から闇に葬られ 11 しに逢 向 0 不 中 取締 の鉄三 り、 つ て 0 郎 廉と 改 野州二荒山 て、 は が め 奪 あ 家督 それ つ 11 去 7

親 分、 驚 11 たぜ、 御 用 聞がなぐり込み の 片棒を か つ な ん

て

縛ら 居 11 る れ ッ 0 だぜ、 頃 て 黙 それより 居た手前も、 は つ 髭でも剃 て ガ 居ろ、 ラ 今 ッ \mathbf{H} 八 は って来 P あ 永井 まり す つ れは御 鉄三 () か 11 ŋ 11 郎様家督 健 器量じ 用 康を 聞 の仁義さ。 取 Þ 相続 戻 な いそ、 て 0) お 尤も、 お 祝 り ま に 招 恥 穴 ば は 0 た お 互 中 れて で

平 次はもう何も彼も忘れてしまっ た 長 関 が な顔 で した。

(編注)

ます。 底本の なる古典的な文学作品でもあり、 が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異 作品中には、 ままとしました。 身体 の障害や人権に ご理解、 ご諒承のほどをお願 かかわる、 著者が故人でもありますので、 差別的な語句や表現 い申し上げ

挿絵―萩 柚月

初出 「 オ ル讀物」 昭和十三年九月号 文藝春秋社

底本 月三十日初版 錢形平次捕物全集」 第四巻 河出書房 昭和三十一年六

編集・発行 銭形倶楽部



銭形倶楽部

http://www.zenigata.club/